

《シンポジウム II》

悪性腫瘍の診断・治療における核医学の役割

司会のことば

安 河 内 浩 (帝京大学医学部放射線科)
町 田 喜 久 雄 (埼玉医科大学総合医療センター放射線科)

このたび会長からの指示でシンポジウムを組む事になりました。似たようなシンポジウムは3年前にも行われており、学会誌に載っていますので一度お読み願いたいと思いますが、今見ても情勢は余り変らない様に思います。

従って今回は見栄を張らないでCT, MR など他の方法との比較を正直に、出来れば客観的な数字になる様に示してみてもいいと思います。余り大した事のない、又治療方針に影響を与えないような手段はやめるべきで、他のモダリティーもそうですが一つだけに拘るのはいかがかと思う訳です。

同時に将来何か素晴らしい可能性があれば、それはそれで夢を話していただきたいと思いました。

その様な事を考えながら最近3年間の一般演題の数を当たりました。総計1768題中286題で大体17%になります。思った以上に多くの演題が出されています。内訳は次の通りでした。

1) 脳腫瘍	33
2) 頭頸部腫瘍	11
3) 乳癌	6
4) 甲状腺癌 (含上皮小体)	33
5) 肺癌	29
6) 肝癌	25
7) 脾癌	1

8) 泌尿器生殖器癌	15
9) 副腎	11
10) 消化管の癌	14
11) 悪性リンパ腫	12
12) 骨・軟部組織	23
13) 腫瘍全般	13
14) 基礎的実験	42
15) 腫瘍マーカー	20

これらのうちで脳と腫瘍マーカーは教育講演があるとの事で除き、多少は日の当たりそうな分野を選び、演者は日常診療をしている方々で報告書を書くだけではなく報告書を受ける立場で核医学の在り方を考えていただける方々と思って選ばせていただきました。

演者の方々には短い時間で内容をアトラクティブにするためテーマを絞って聴衆を引き付けて頂き、散漫にならないようにお願いすると共に是非患者に密着する内容であるようお願いしております。

画像診断の近年の素晴らしい発展の陰に核医学はどちらかというと隠れている感じもありますが、他のモダリティーにない機能を画像にするといい点で楽しい未来を話していただけるものと思っています。